

アキレス腱付着部症に対する Suture bridge 法による 再建術の短期成績

○宮本 拓馬 (みやもと たくま)(MD)¹⁾, 熊井 司 (MD)²⁾, 松井 智裕 (MD)³⁾,
東山 一郎 (MD)⁴⁾, 田中 康仁 (MD)⁵⁾

- 1) 済生会中和病院 整形外科
- 2) 奈良県立医科大学 スポーツ医学講座
- 3) 済生会奈良病院 整形外科
- 4) 松倉病院 整形外科
- 5) 奈良県立医科大学 整形外科

【目的】

我々は難治性のアキレス腱付着部症に対し、アキレス腱を縦割して付着部を郭清したのち suture bridge 法による付着部再建術を行っている。今回、その短期成績に対して検討を行う。

【方法】

対象は2014年1月から2016年4月の間に手術を施行した9例10足。術後平均 follow up 期間は26ヶ月(12～43ヶ月)。臨床評価は AOFAS score, SAFE-Q, VAS にて、画像評価はMRIにて踵骨後部滑液包炎の有無、腱実質内の変性所見の有無、踵骨への付着部長、付着部近位端における腱厚に対して、術前と最終経過観察時とを比較した。

【結果】

AOFAS score, SAFE-Q, VAS は全例において改善を認めた。滑液包炎は術前4足に観察されたが、術後は全例で消失していた。腱実質内の高信号変化は術後減少傾向にあり骨棘の再発は認めなかった。付着部長は術前後で平均152%の増加を示し、付着部近位端における腱厚はそれぞれ217%の増加を認めた。

【考察】

Suture bridge 法による再建術前後で腱実質内の変性像は減少しており、付着部を再建することで腱実質にも修復起点が働いたことが考えられる。また、本術式では踵骨への付着部接触面積が拡大したことで付着部に集中していた応力が分散されたことで再発予防にもつながったと考えられる。腱厚の増加は変性した腱の修復過程に伴う肥大化によるものと考えられた。

【結語】

アキレス腱付着部再建術により付着部面積の拡大と、良好な腱修復が起こっていると考えられ、その結果、良好な短期術後成績が得られた。